

たけい だ あや さぶ ろう

武田斐三郎



じゃこれから一緒に勉強しましょう。

ゆうすけくんはなーにも知らないんだから。



なにそれ？

武田斐三郎は五稜郭を築いた人ですよ。

カミヤ カミヤ



お父さん

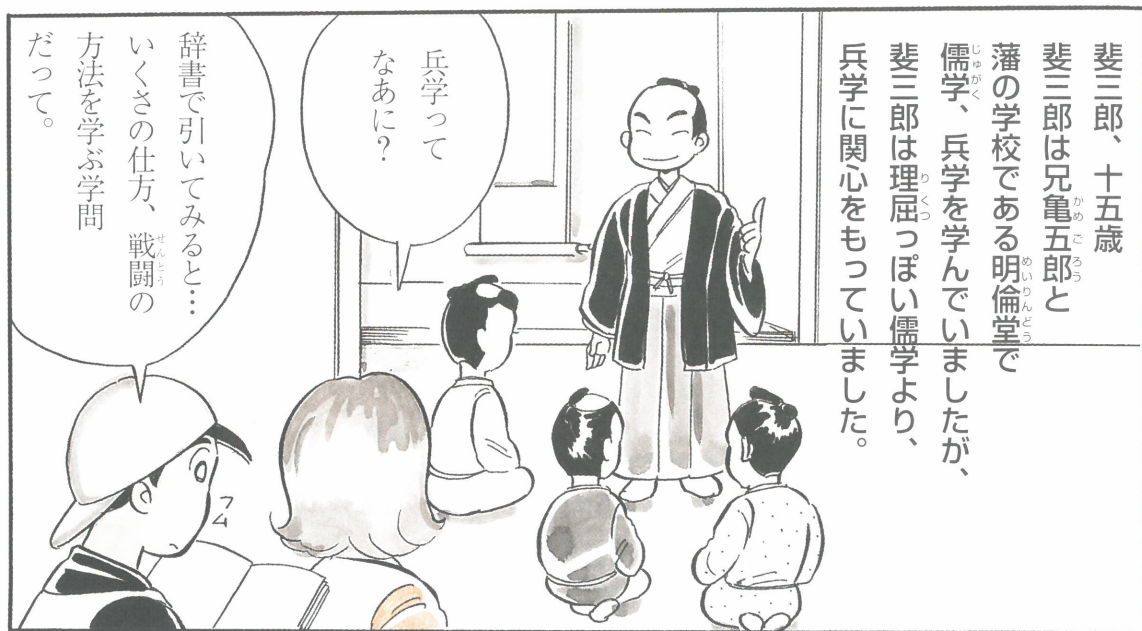
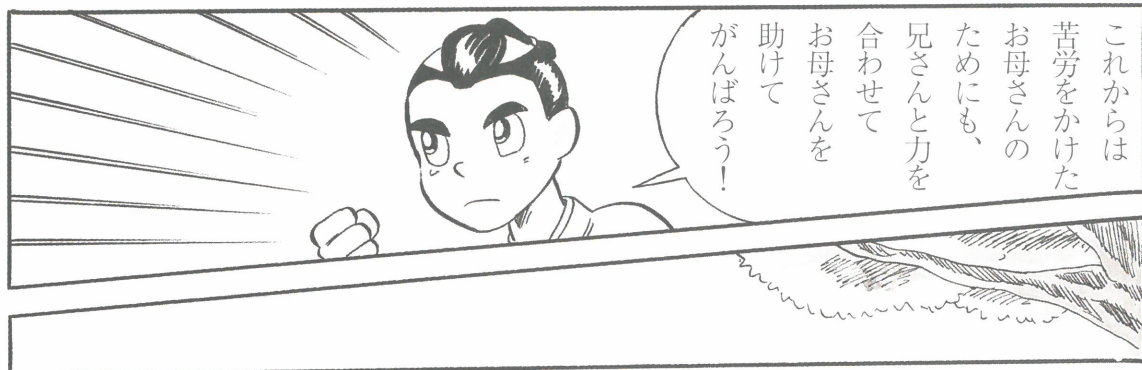
お父さん、死なないで。

天保十年（一八三九）十二月、斐三郎の父はついに天国へと旅立ってしまいました。



カミヤ

斐三郎は文政十年（一八二七）九月十五日、喜多郡中村（現在の太田市）に、父勘右衛門、母三保子の次男として生まれました。斐三郎の家は生活が苦しかったので、母が機を織って家計を支えていました。

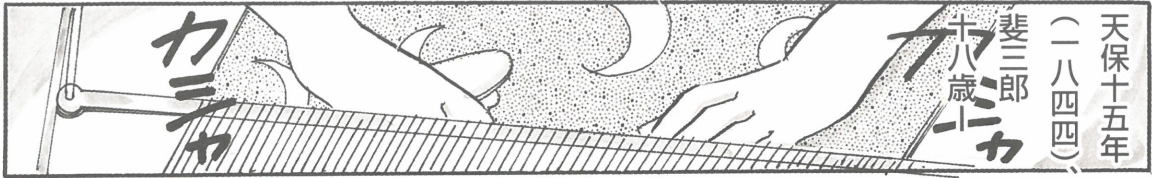


天保十五年

(一八四四)

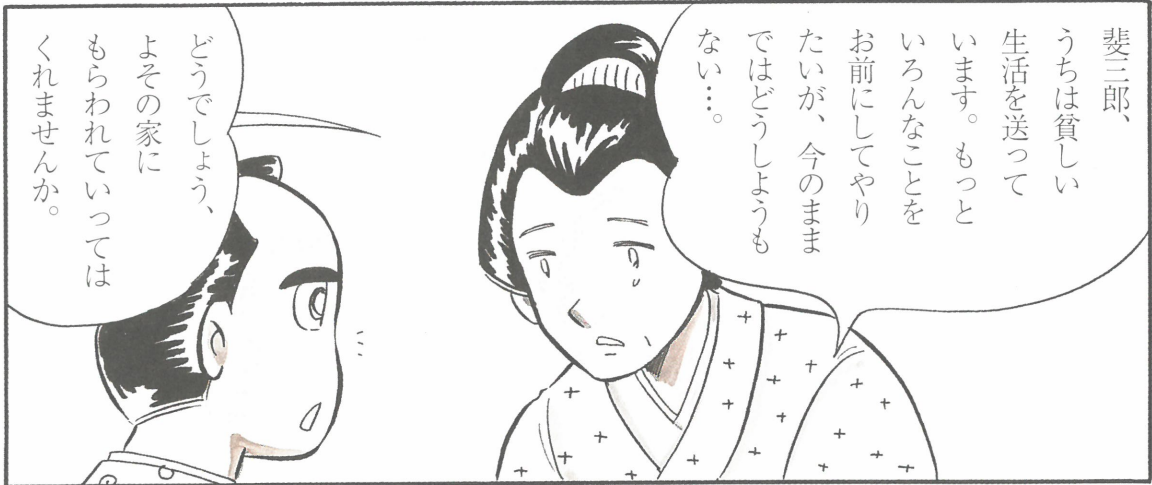
斐三郎

十八歳



斐三郎、
うちは貧しい
生活を送って
います。もっと
いろんなことを
お前にしてやり
たいが、今のまま
ではどうしようも
ない…。

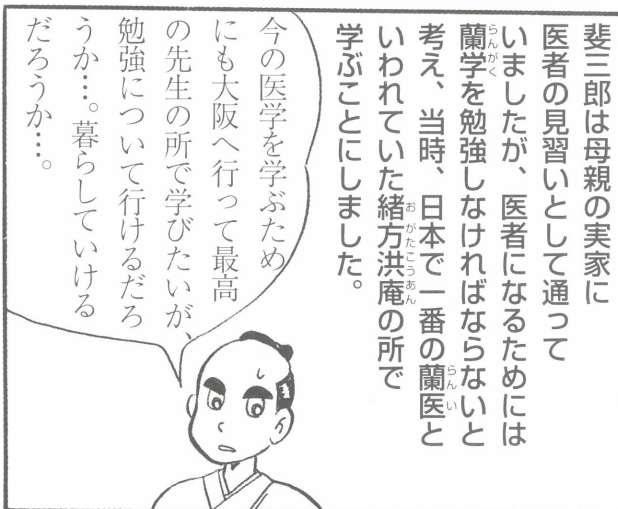
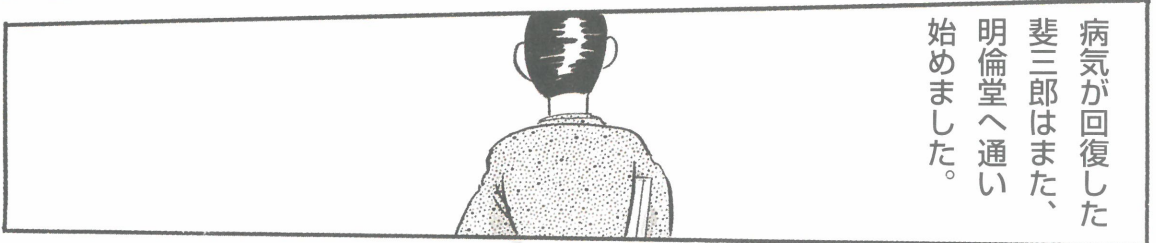
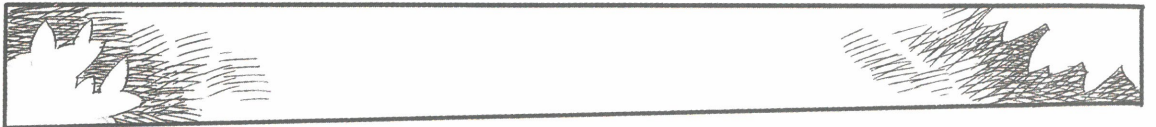
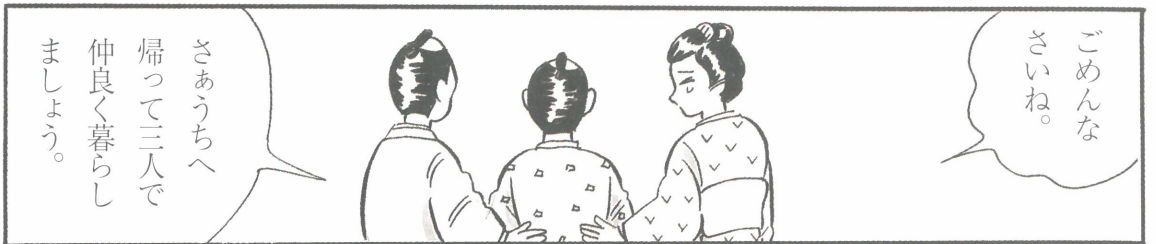
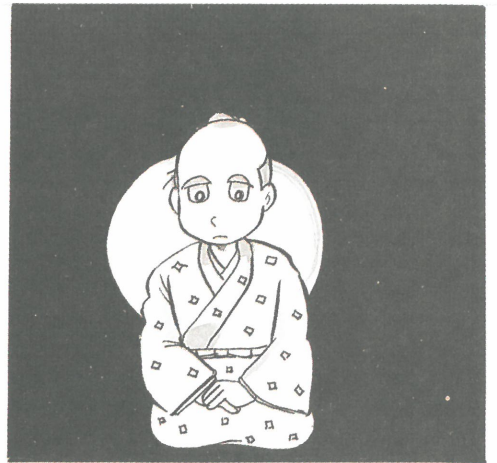
どうでしょう、
よその家に
もらわれていって
は
くれませんか。



今のままでは
お母さんに苦労を
かけるばかりだ。しかし、
お母さんをおいて
よその家について
自分だけ楽な生活
するなんて…。
どうすればいいんだ
ろう。

わかりました。
お母さんにも
あまり苦労は
かけられません。
あちらの家で
がんばります。





斐三郎は家のごとく、これからのことを
悩みながらも、緒方洪庵の所で学ぶ
決心をし、大阪へと旅立ちました。



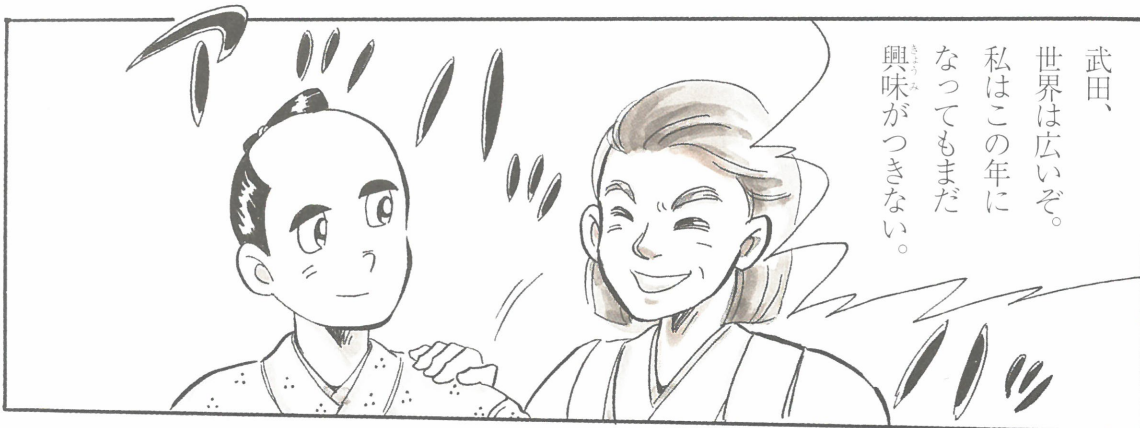
斐三郎二十二歳、大阪、緒方洪庵の
適齋塾―洪庵のもとには全国から
多くの門下生が
集まっていました。



みんな優秀な人たちばかりで、
このままでは勉強について
行けなくなりそうだ。



武田、
世界は広いぞ。
私はこの年に
なってもまだ
興味がつきない。

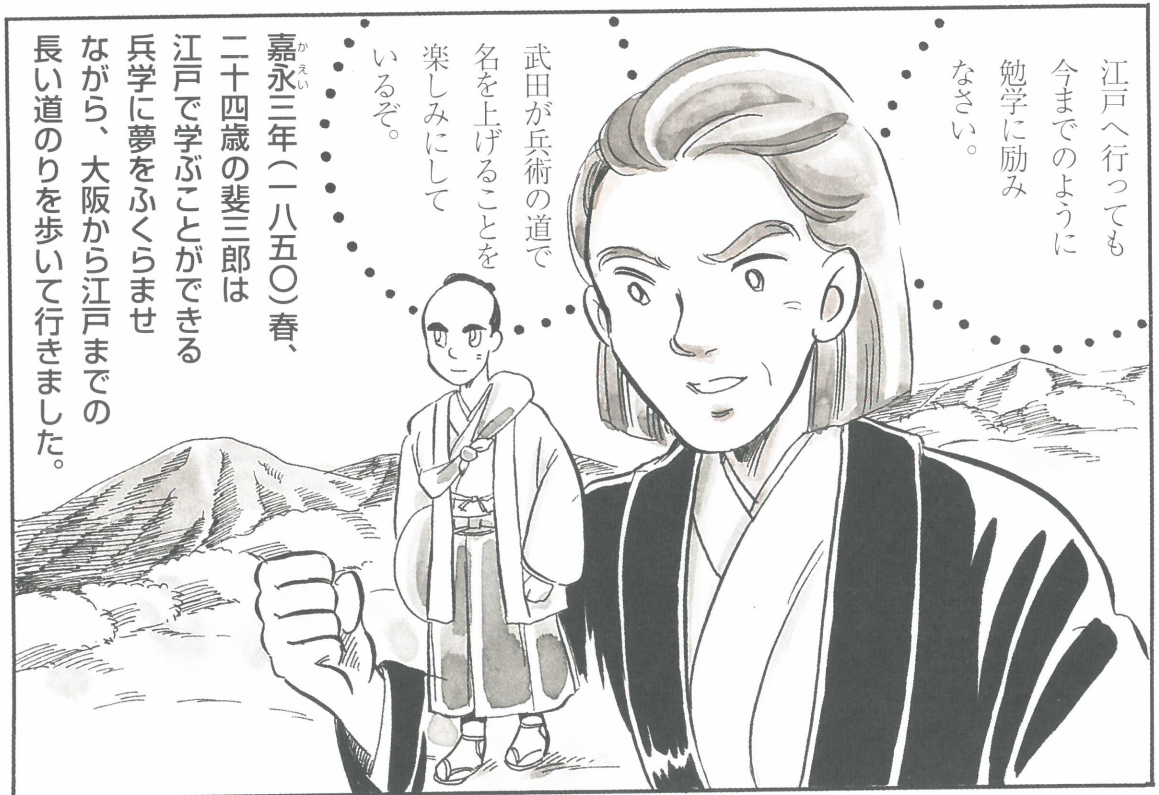
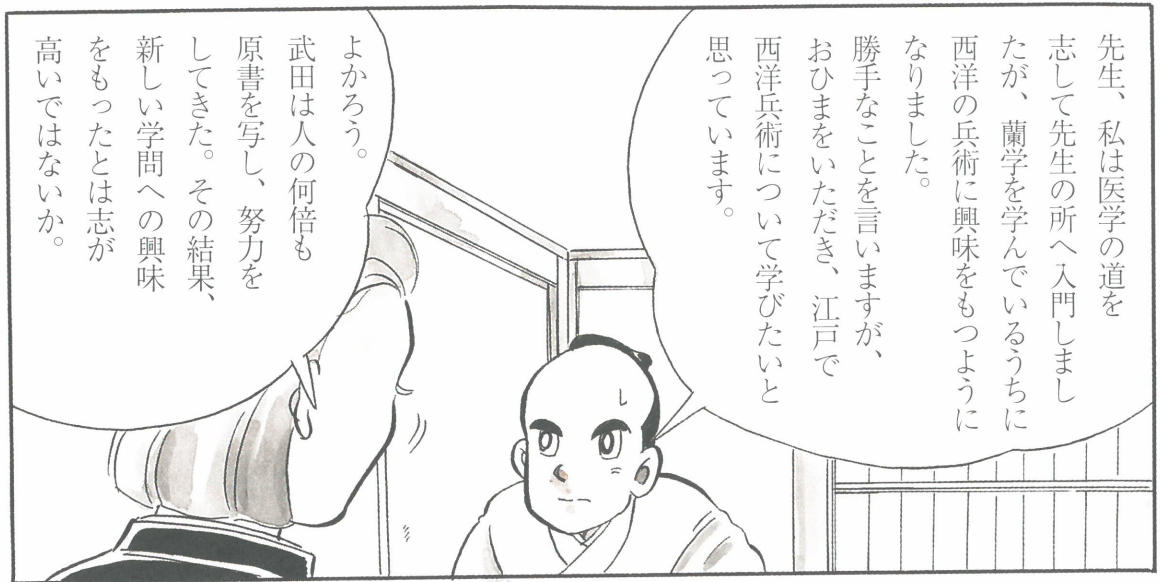


斐三郎は鈴木春山が訳した
オランダ兵書『三兵括法』などを
読むようになり、西洋兵術に
興味をもつようになりました。

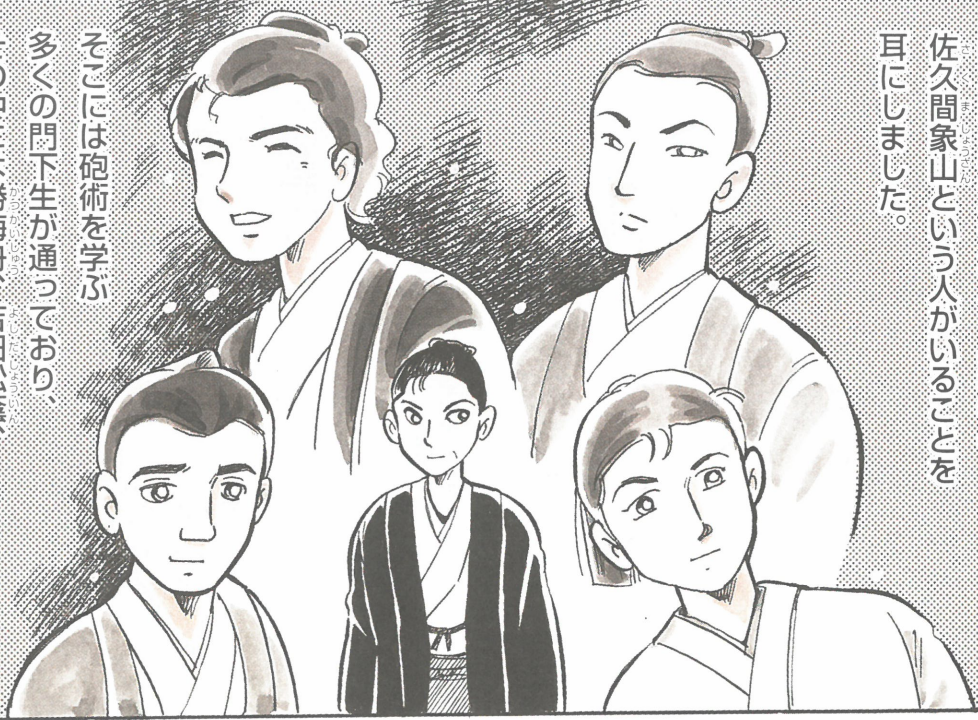


今までに
知らなかった兵術が
西洋にはいっぱい
あるようだ。
面白そうだ。
西洋兵術について
学びたい。





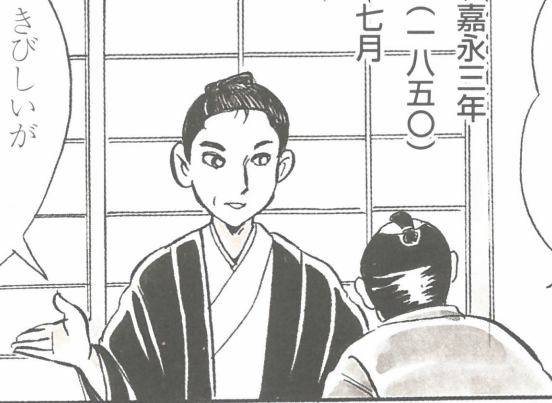
斐三郎は江戸の深川に兵学者の
佐久間象山という人がいることを
耳にしました。



そこには砲術を学ぶ
多くの門下生が通っており、
その中には勝海舟、吉田松蔭、
坂本龍馬、加藤弘之たちの姿もありました。

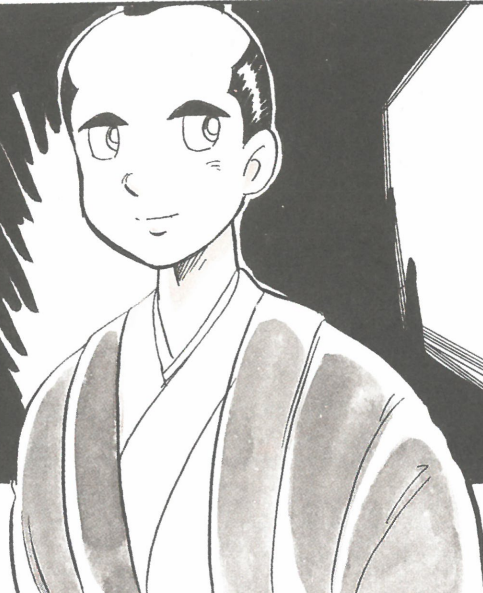
先生のもとで
新しい兵学を
学びたいと
思っております。
どうか、門下生に
してください。

嘉永三年
(二八五〇)
七月



きびしいが
ついてこれるか。
そのやる気を
忘れずに兵学に
打ち込んでみなさい。

斐三郎は
象山の門下生と
なりました。象山のもとで
学んだ知識と技術が
その後の方向を決定する
ものになりました。



嘉永六年(二八五三)

六月三日、

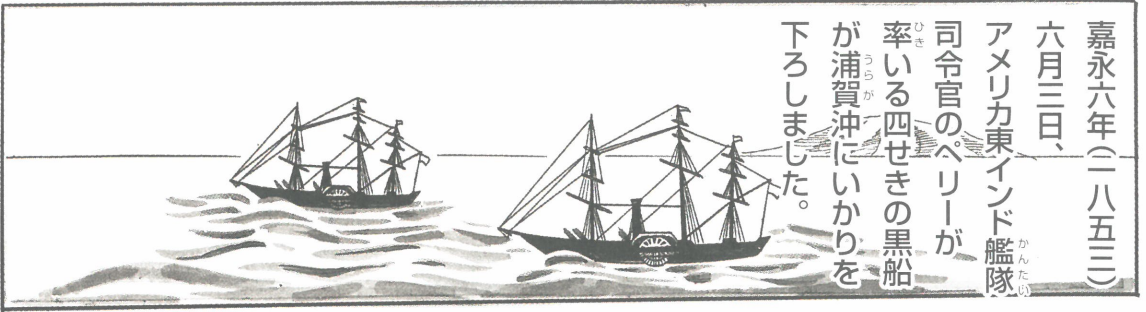
アメリカ東インド艦隊

司令官のペリーが

率いる四せきの黒船

が浦賀沖にいきりを

下ろしました。



何と大きな大砲がついているのだろう。もし黒船と一戦を交えることになればまず勝ち目はあるまい。江戸湾の備えは粗末だ。何とかしなくては…。

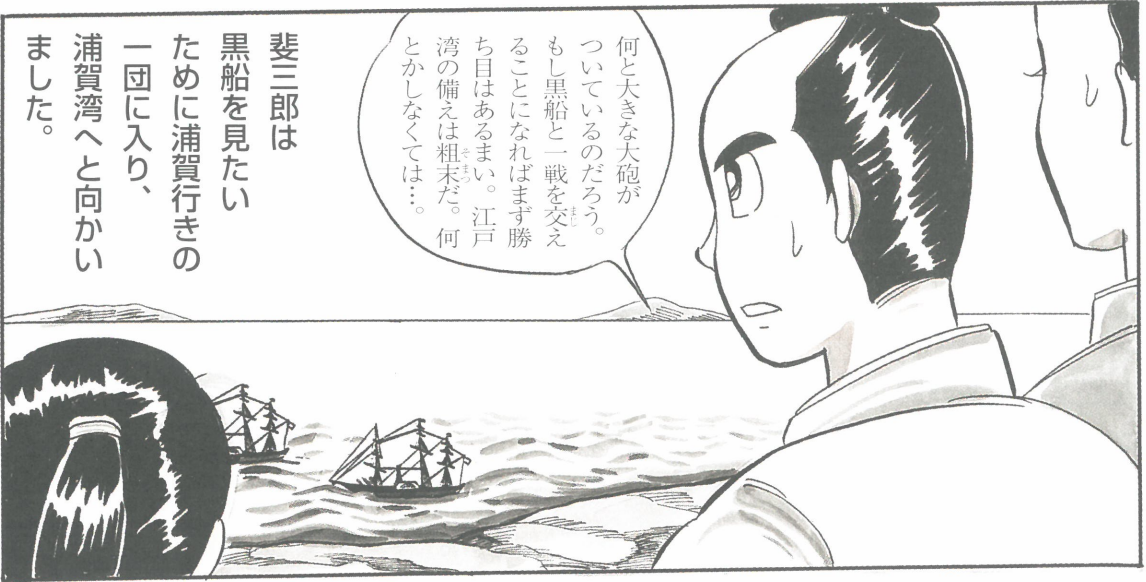
斐三郎は

黒船を見たい

ために浦賀行きの

一団に入り、

浦賀湾へと向かいました。



こうなることは

わかっていた。昨年、

日本は海に囲まれた国

だからオランダから軍艦を

買って、優秀な海軍を

作らなくてはならないと

幕府へ申し出たのだが、

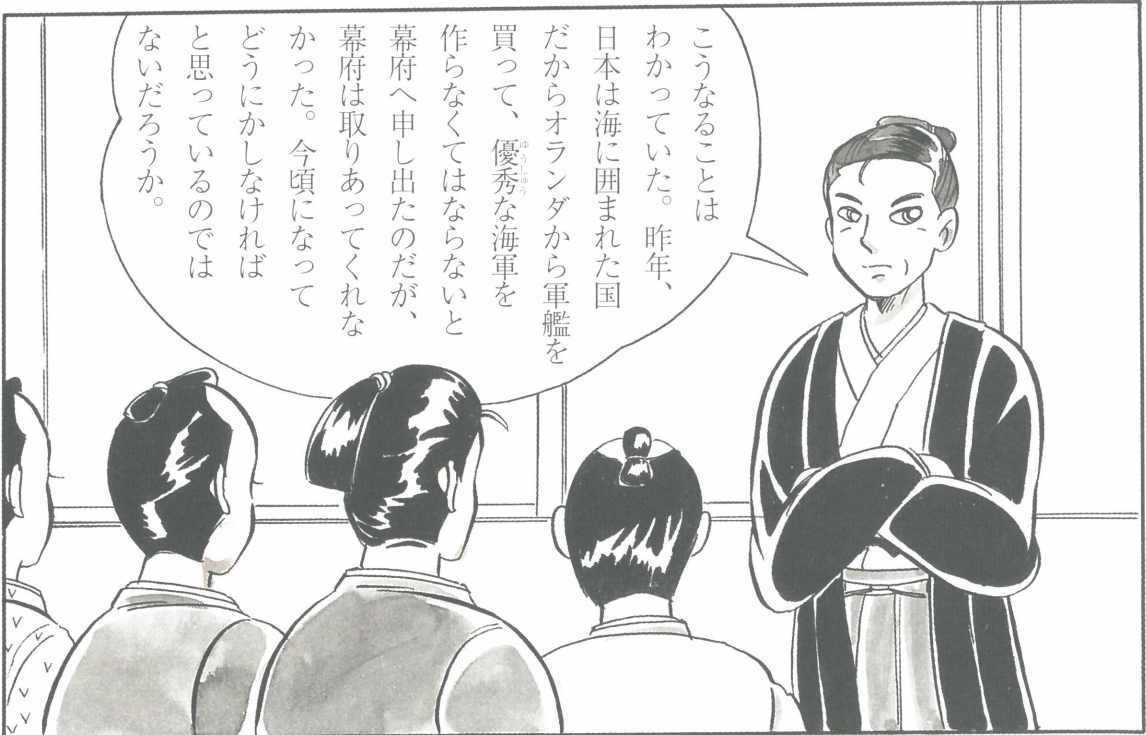
幕府は取りあってくれな

かった。今頃になって

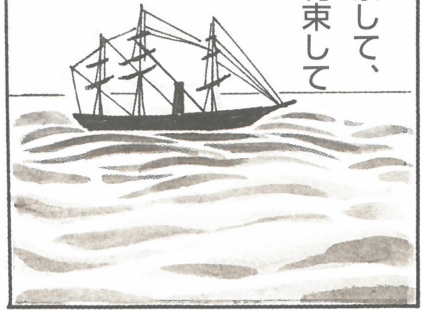
どうにかしなければ

と思っっているのでは

ないだろうか。

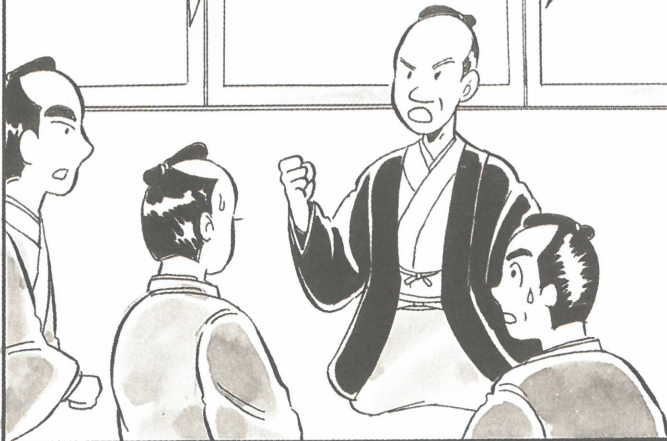


しかし、黒船は日本の国情を察して、六月十二日、一年後の再来を約束して引き上げました。

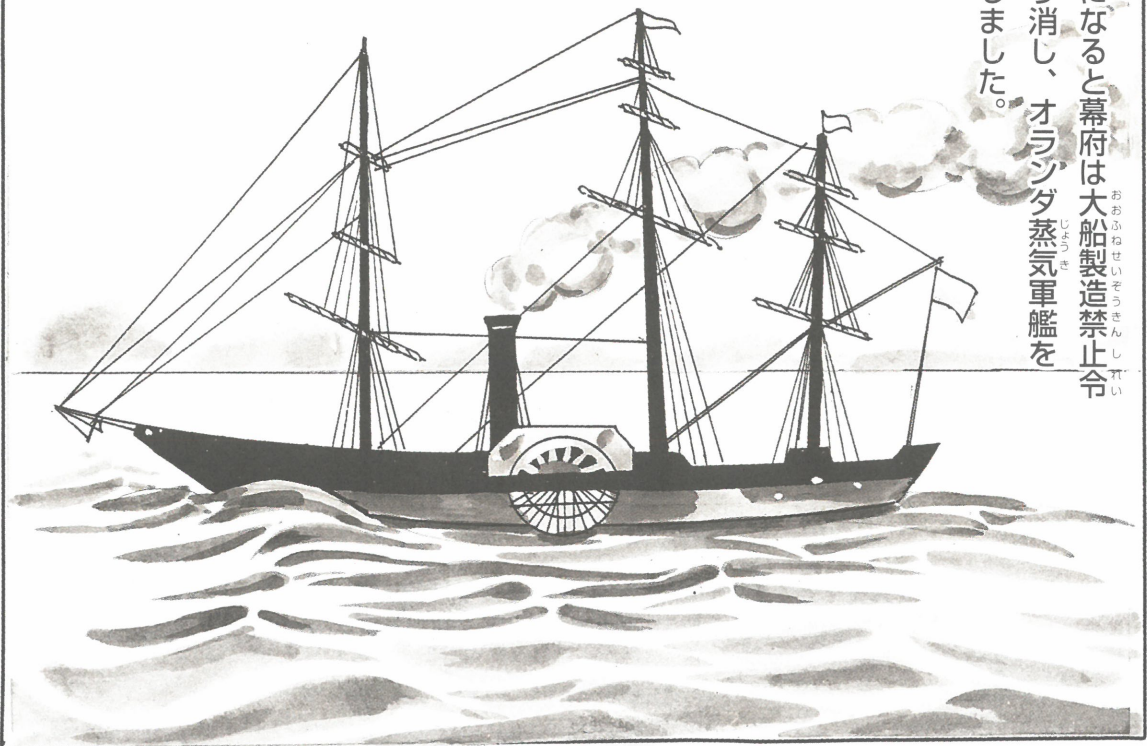


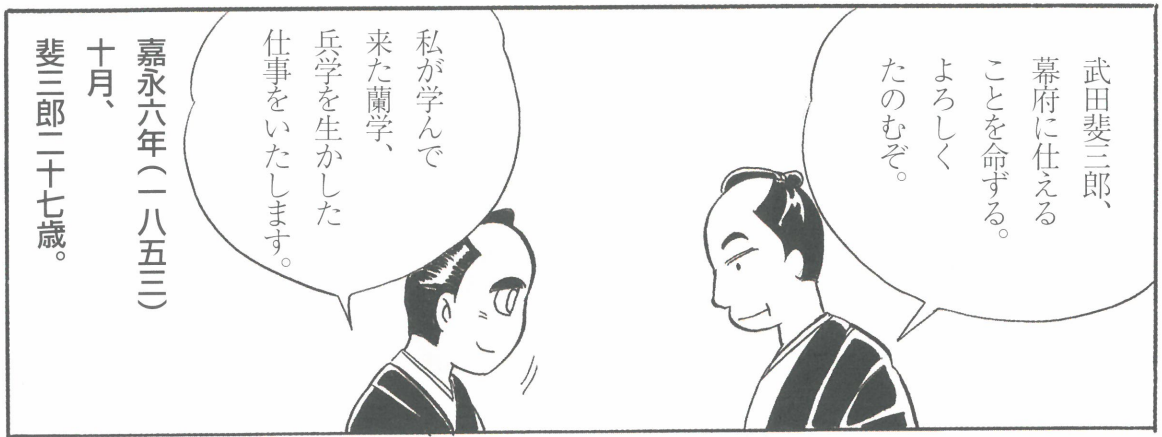
このままでは日本は戦いに負けてしまう。

軍を強くしなくてはならないな。



九月になると幕府は大船製造禁止令を取り消し、オランダ蒸気軍艦を注文しました。

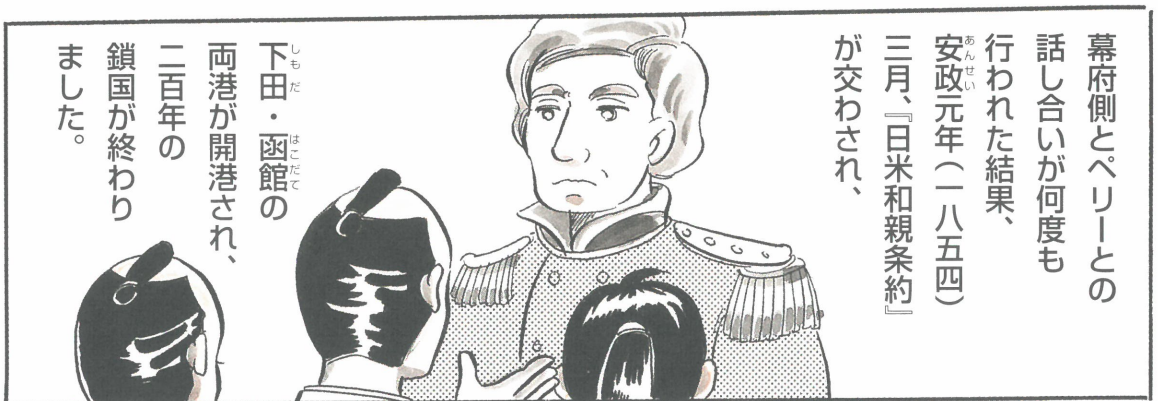
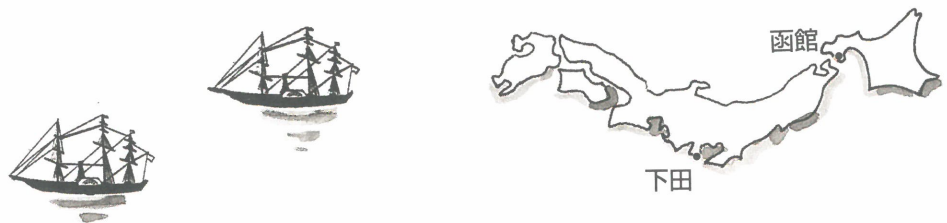




武田斐三郎、幕府に仕えることを命ずる。よろしくたのむぞ。

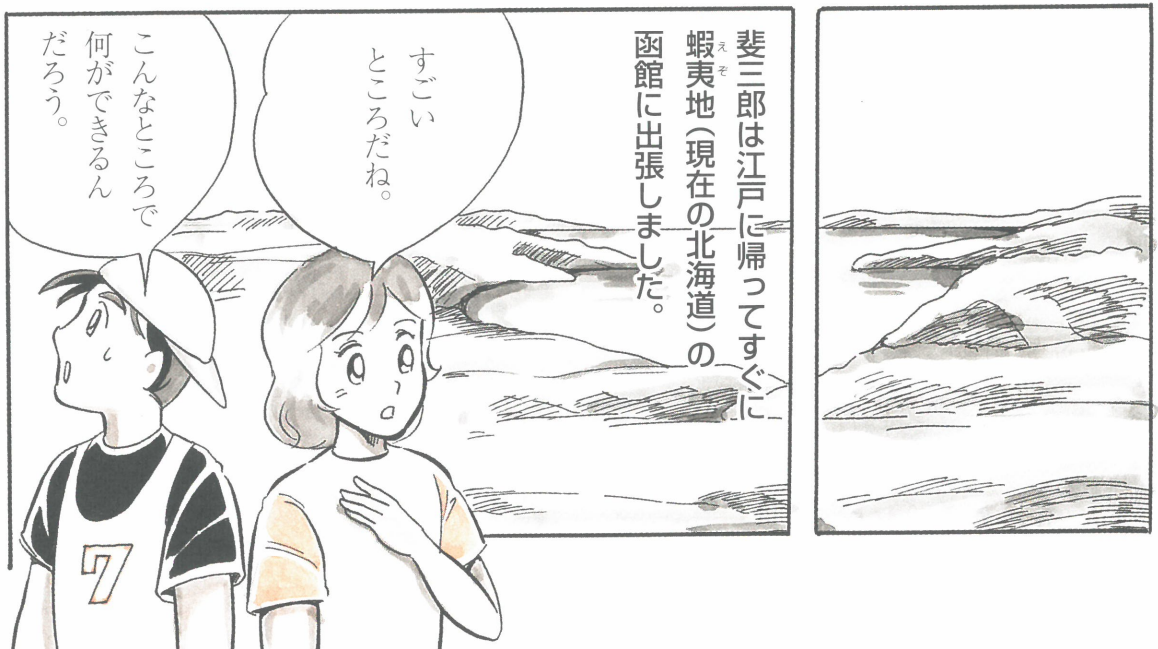
私が学んで来た蘭学、兵学を生かした仕事をいたします。

嘉永六年（一八五三）十月、斐三郎二十七歳。



幕府側とペリーとの話し合いが何度も行われた結果、安政元年（一八五四）三月、『日米和親条約』が交わされ、

下田・函館の両港が開港され、二百年の鎖国が終わりました。



斐三郎は江戸に帰ってすぐに蝦夷地（現在の北海道）の函館に出張しました。

すごいところだね。

こんなところで何ができるんだろう。

二十八歳秋

蝦夷地は世界との
つながりの上から重要な
地点として開港されるこ
とになった。その地を開
発することを命じられた
とはありがたいことだ。
ずっと蘭学、兵学を学ん
で来て、私の理想を現実
にする機会が訪れた。が
んばらなければ…。

幕府の許しを得て
函館港の調査にやってきた
ペリーの接待に当たること
も斐三郎の仕事でした。

斐三郎はペリーが
帰った後も国の軍の
仕事や、外国人の接待の
ため、貴重な係として函
館で仕事を続けることにな
りました。

斐三郎は函館山に
たびたび登り、さまざま
夢を描いていました。

鉄を造り、船を組み立て、
その船で日本を回り、
ヨーロッパ、アメリカへと
行きたい。

斐三郎のもとに
幕府から手紙が届きました。

なになに
多額な予算も
取ってあるようだ。
これだけの予算が
あれば軍の施設の
建設に取りかかれる。

斐三郎は江戸より
持ってきたオランダ築城
書や象山らに
学んだ記録を
取り出して、砲台及び
役所の設計に、寝る時間
をおしんで取りかかり、
安政二年（一八五五）の
夏に設計図を作りました。

同年十月、

二十九歳の時に
梨本美那子と函館で
結婚しました。

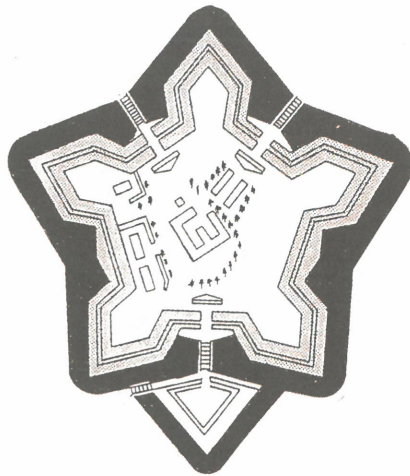
結婚後、斐三郎は
熱心に仕事に
取り組みました。

第一次工事
弁天崎砲台
工事開始

設計どおり
うまく造ることが
できるだろうか…。

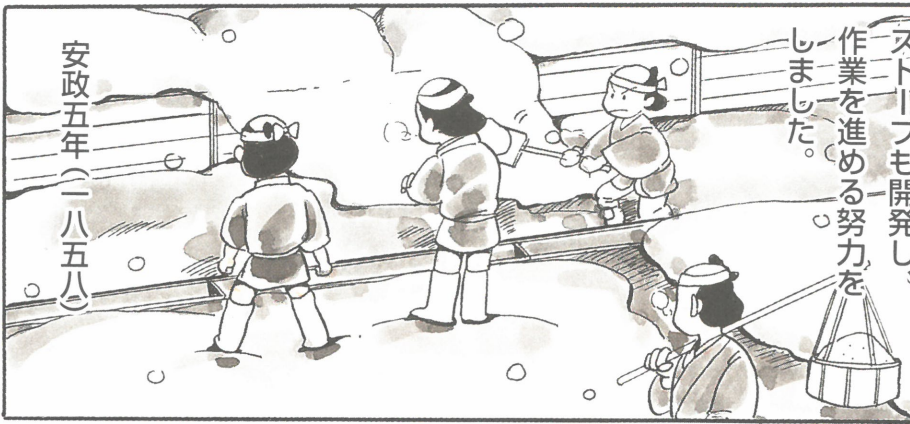
斐三郎の胸には
期待と不安が
うずまいていました。

続いて函館に五稜郭の工事を始め、
斐三郎はすぐれた力を
発揮しました。



五稜郭は、城の堀を星型にし、
そのつき出た部分に大砲を置き、
そこから敵の兵士を撃とうという
城です。オランダの築城書から
学び、建設を進めました。

寒さのため
仕事が進まなかったり、
とうしようになる人も
いたので斐三郎は
ストーブも開発し、
作業を進める努力を
しました。



安政五年（一八五八）

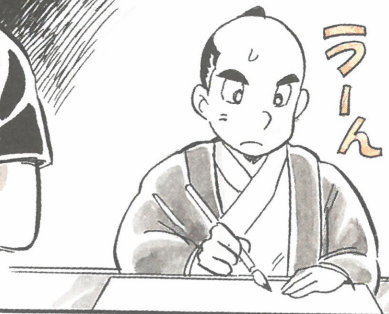
なかなか設計図の
ようにはいかん。
費用はかかっても
確かな城を築かな
ければ

…やっぱり
寒い所では

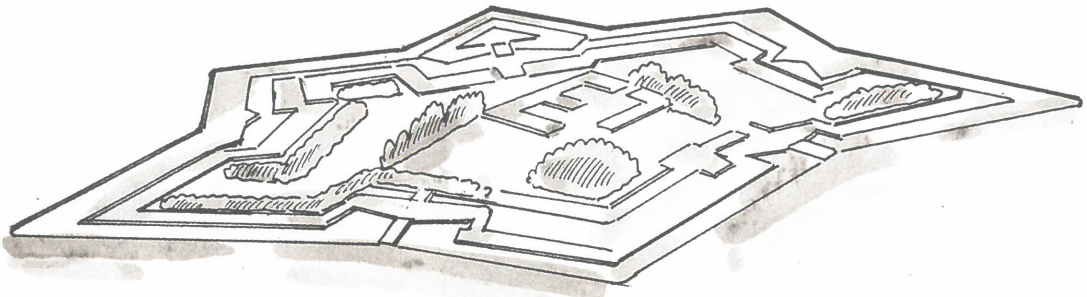
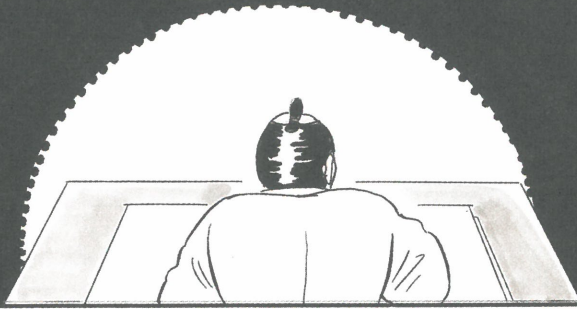
うまくい
かないことも
あるんだね。

斐三郎さん、
かわいそう。

ライオン



斐三郎は
 工事の問題が出るたびに
 設計や工事などについて
 考えたり、悩んだりする
 日々が続きました。

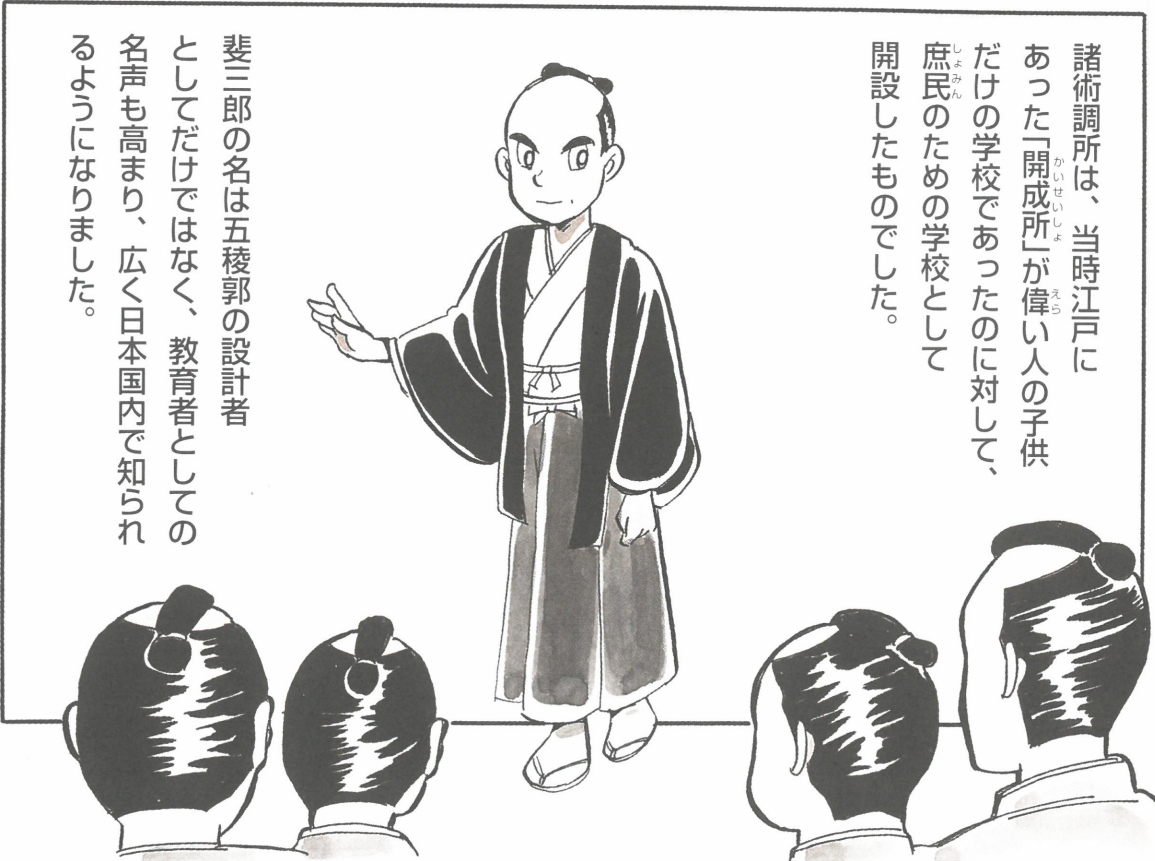
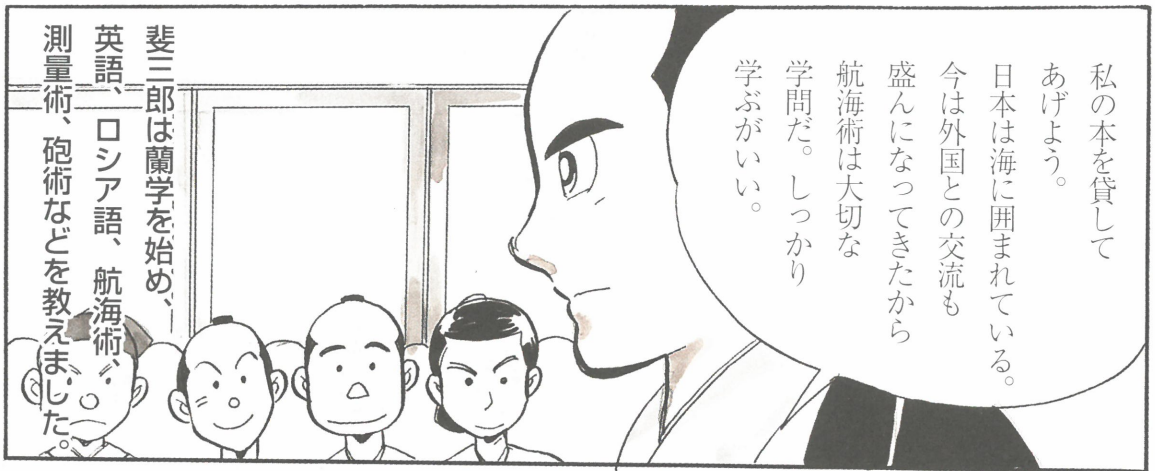
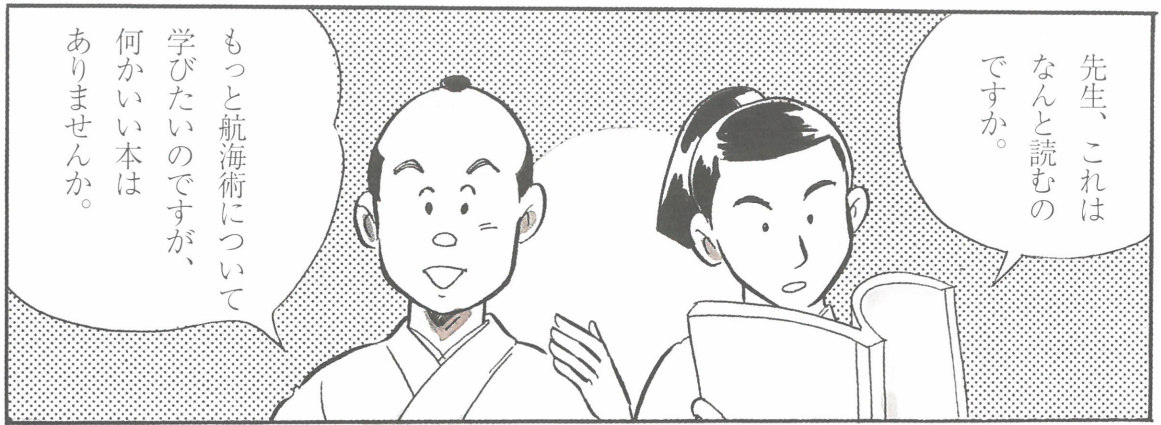


斐三郎と職人たちの七年間の
 努力により、元治元年（一八六四）、
 斐三郎が三十八歳の時、総面積
 二十四万七千九百二㎡の
 五稜郭は完成しました。



斐三郎は
 弁天崎砲台、
 五稜郭建設の企画監督に
 当たるかたわら、函館に
 諸術調所しよじゆつてうじよという洋学教授
 所を設けました。





元治元年（一八六四）
江戸幕府—
斐三郎は蝦夷地
での仕事が認められ、
七月より江戸開成所の
教授に選ばれました。

斐三郎は文久三年
（一八六三）春、妻美那子
を亡くしましたが、
同年八月、大塚高子という
女性と二度目の結婚を
しました。

斐三郎様、
私は江戸で
暮らしていきます
でしょうか。

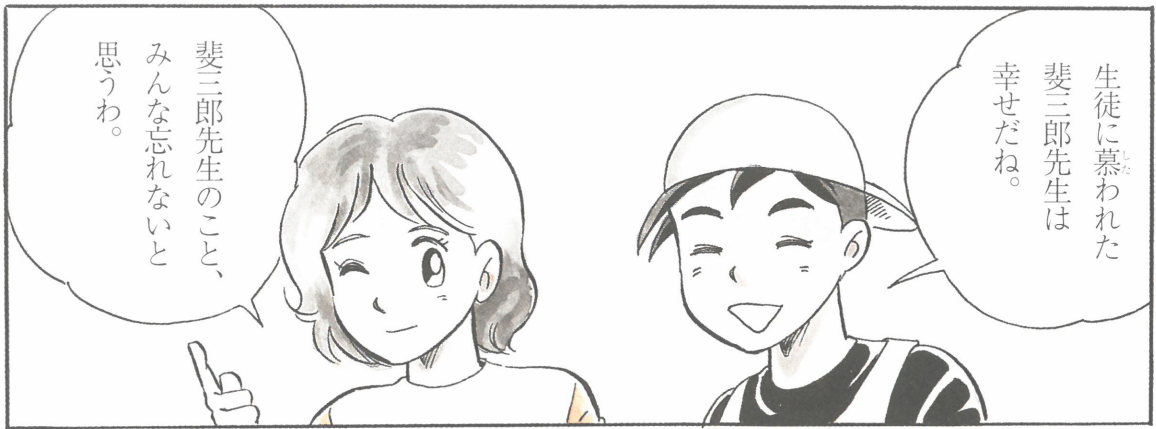
だいじょうぶだ。
私がついているでは
ないか。江戸でも
忙しい日々が続くと
思うがたのむぞ。

武田様と
別れるのは
とてもつらいの
ですが江戸でも
いいお仕事を
なさってください。

先生、いつか
先生とごいっしょに
お仕事できる日が
来ることを楽しみに
学問に励みます。

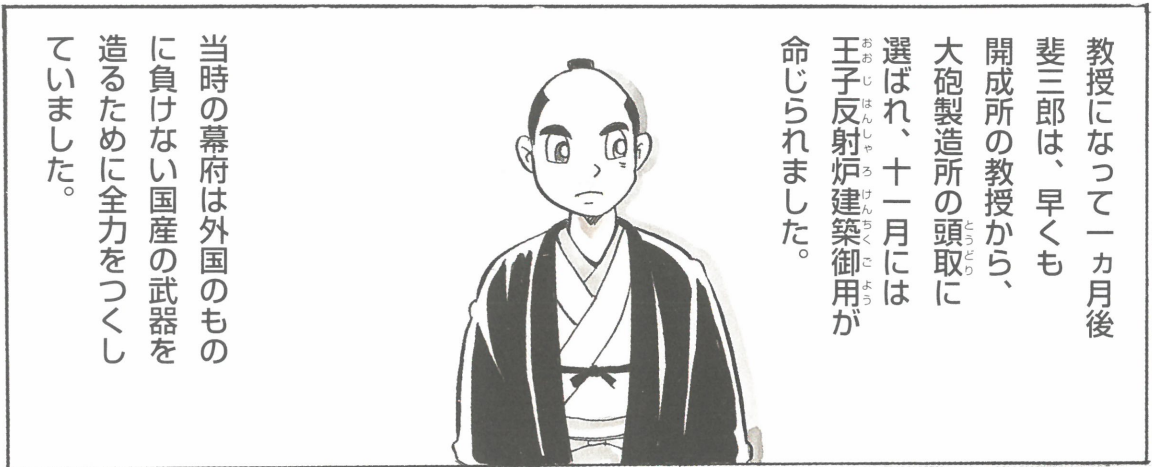
十年前、函館に来た頃はまだ若い学生だった
斐三郎が、函館を旅立つ時には全国有数の
洋術兵学者となっていました。

函館のことや
みんなのことは
忘れないぞ。
斐三郎はみんなとの別れをおしみながら
今までのことを思い出し感動していました。



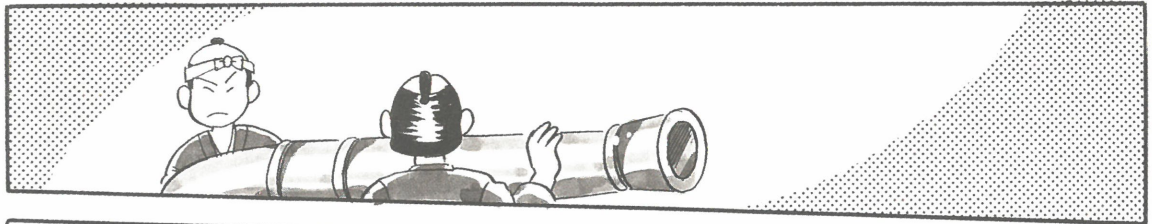
生徒に慕われた
斐三郎先生は
幸せだね。

斐三郎先生のこと、
みんな忘れないと
思うわ。



教授になって一カ月後
斐三郎は、早くも
開成所の教授から、
大砲製造所の頭取に
選ばれ、十一月には
王子反射炉建築御用が
命じられました。

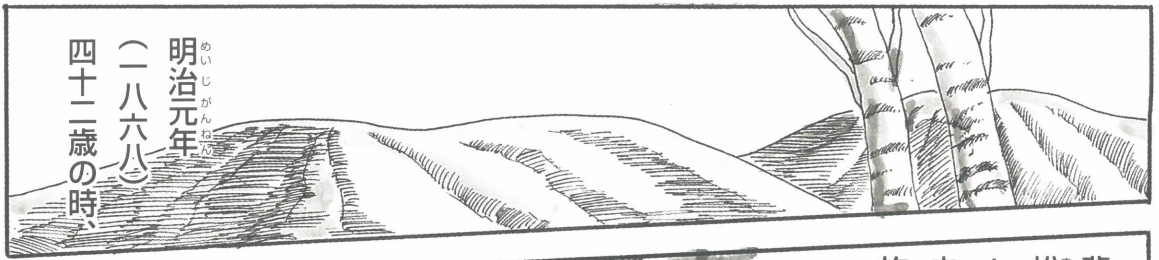
当時の幕府は外国のもの
に負けない国産の武器を
造るために全力をつくし
ていました。



西洋の大砲に
負けないものを
造らなくては
いけない。

そうで
ございます。
西洋人をびつくり
させるようなもの
を造りましょう。

しかし、外国の大砲の優れた威力
の前には斐三郎が造る大砲はまだ
まだ及びませんでした。

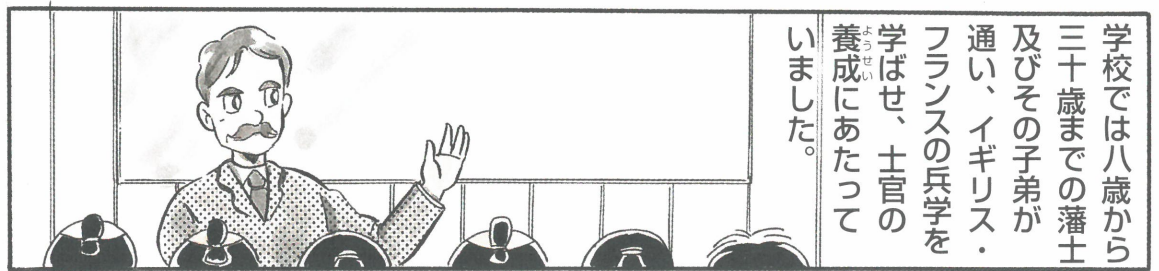


明治元年
(一八六八)
四十二歳の時、



斐三郎は信州(現在の長野県)松代藩より軍政改革の指導者として招きたいという申し入れがあり、松代へ旅行に出かけました。

そこでの歓迎ぶりに感動した斐三郎は、松代に移り住む決心を固めました。



学校では八歳から三十歳までの藩士及びその子弟が通い、イギリス・フランスの兵学を学ばせ、士官の養成にあたっていました。



美しい川があり、緑の山に囲まれたいいところだった。大洲で育ったからこそ、いまの私があるのかも知れない。

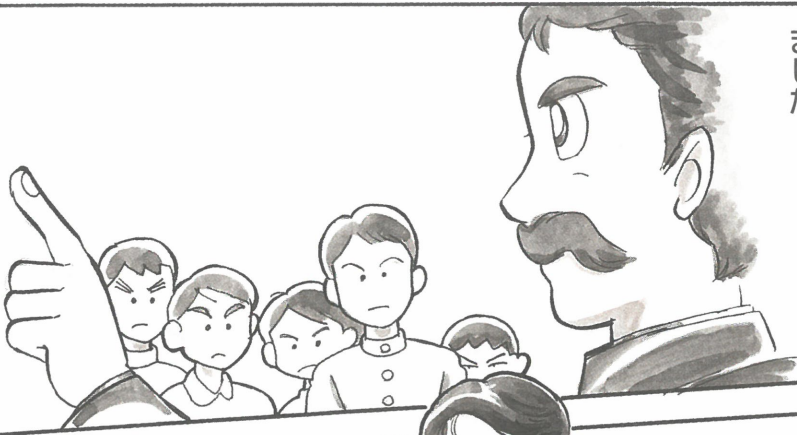
あなたの生れた大洲はどういう所でしたの？



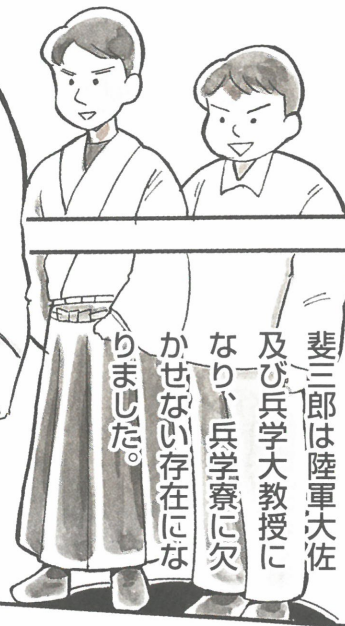
お前たち！
気をつけて遊べよ。
私も幼い頃、ああやって町の中心を流れる肱川で遊んだものだ。

キヤッ
キヤッ

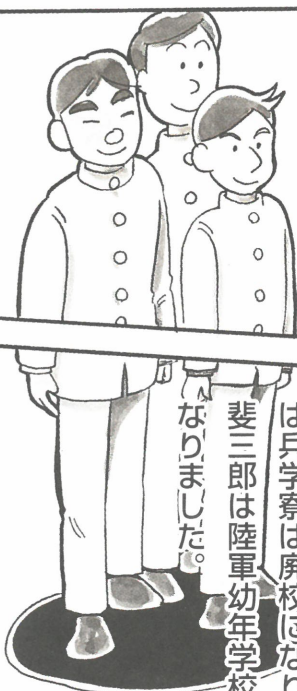
明治五年（一八七二）
四十六歳の時、斐三郎
は後の陸軍兵学校であ
る大阪兵学寮の教授と
して再び教壇に立ち
ました。



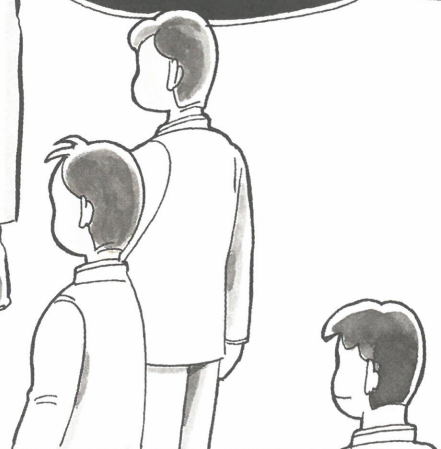
同年十一月には
兵学寮第一宿舍長、
翌明治六年（一八七三）
五月には第三学舎長
を命じられ、学生た
ちと生活をともにし
ました。

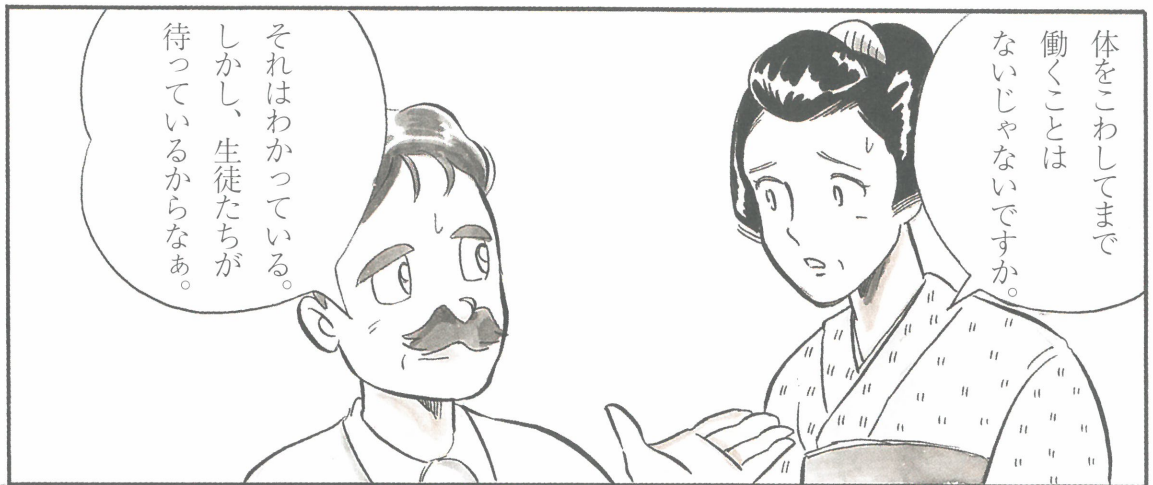
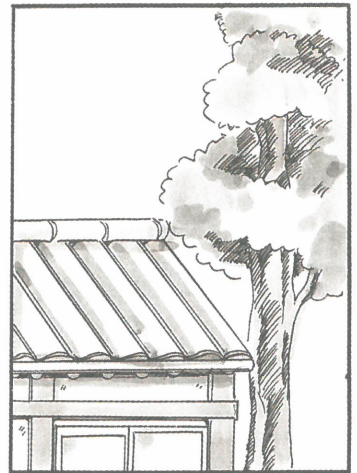


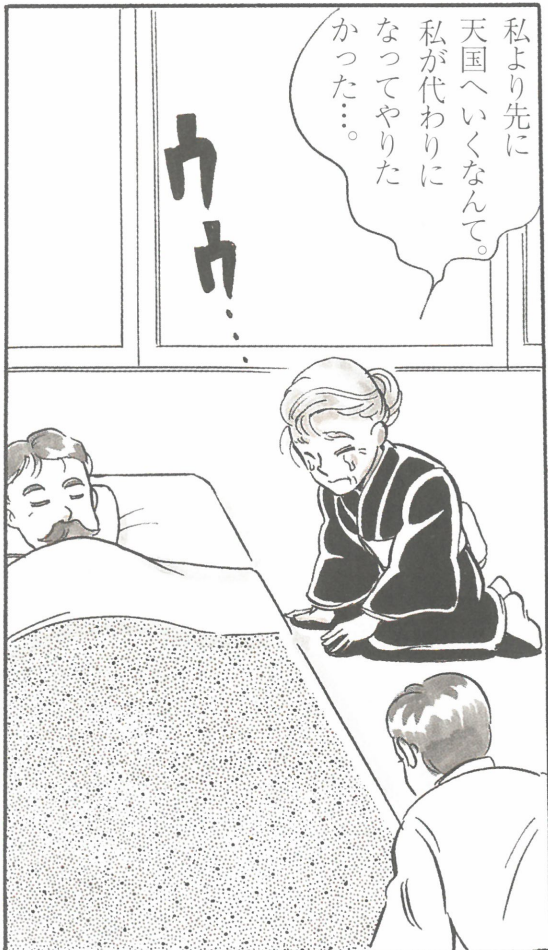
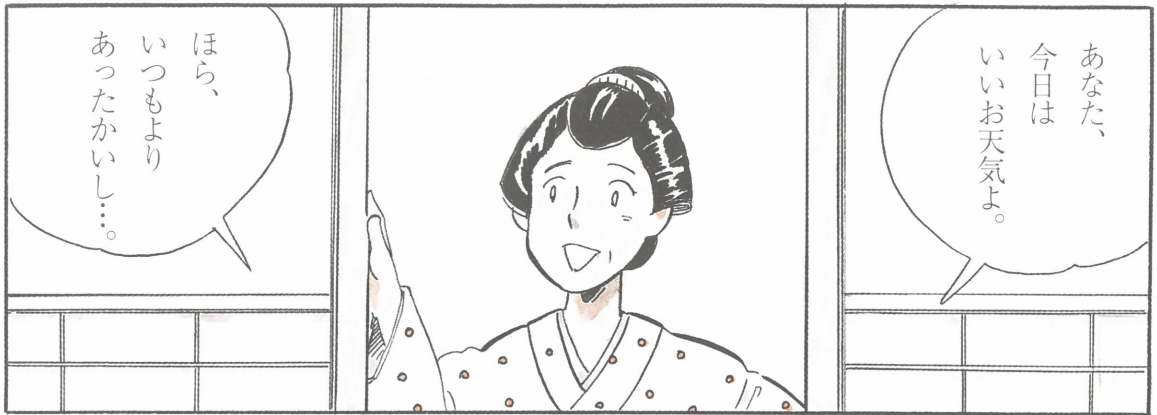
そして、明治七年
（一八七四）三月、
斐三郎は陸軍大佐
及び兵学大教授に
なり、兵学寮に欠
かせない存在にな
りました。

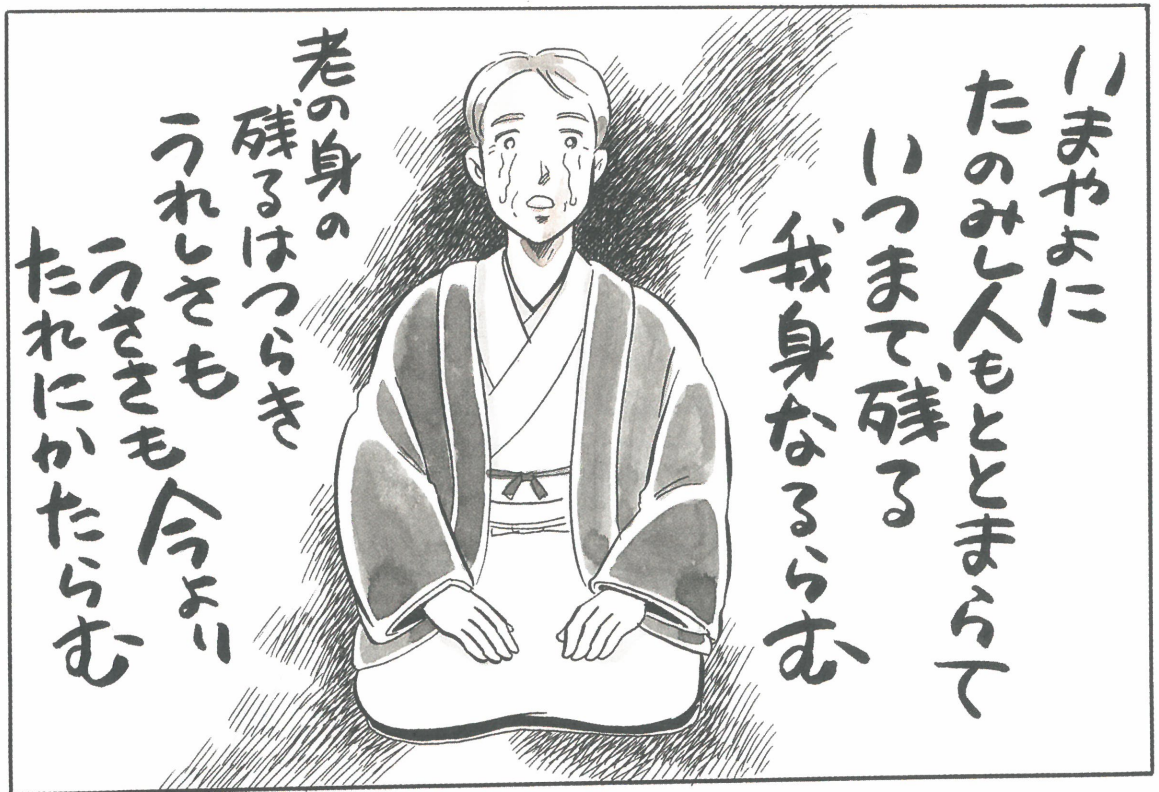


また明治八年（一八七五）五月に
は兵学寮は廃校となり、
斐三郎は陸軍幼年学校の校長に
なりました。









いまやよに

たのみし人もととまらて

いつまで残る

我身なるらむ

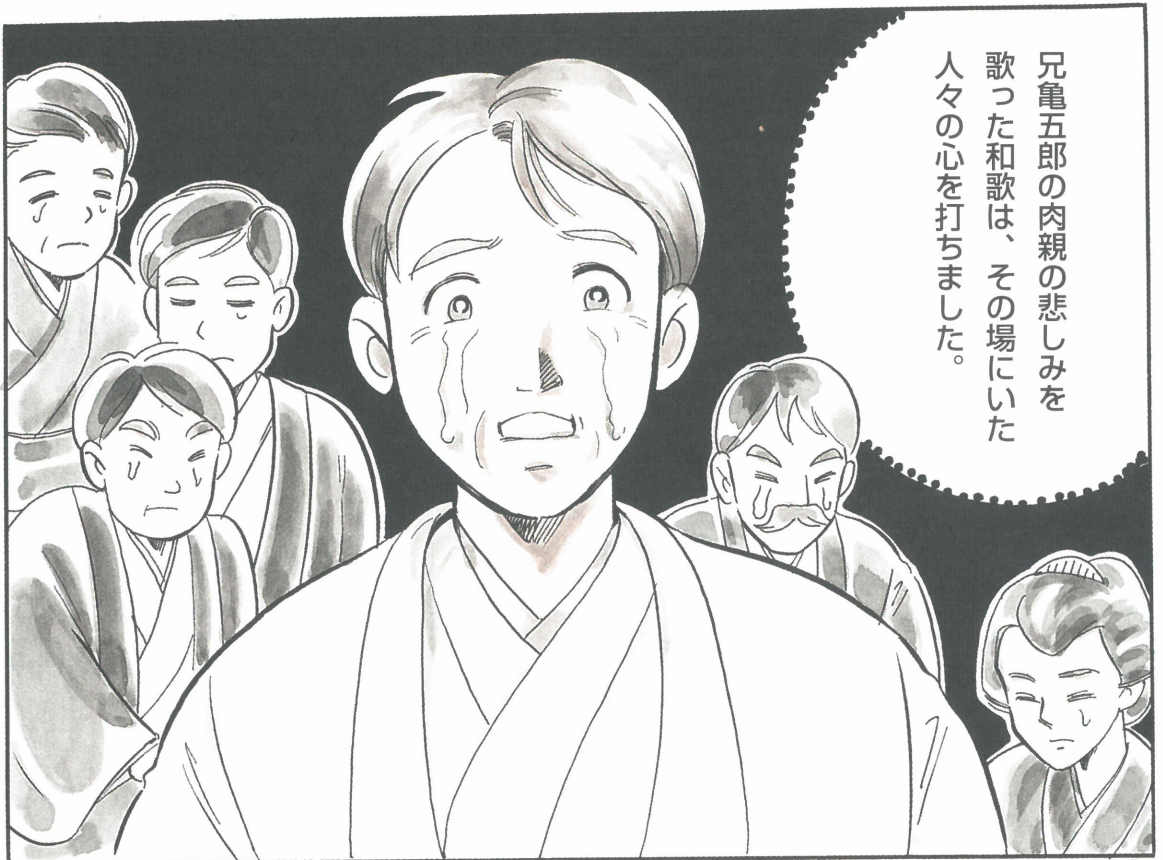
老の身の

残るはつらき

うれしさも

うささも今より

たれにかたらむ



兄亀五郎の肉親の悲しみを
歌った和歌は、その場にいた
人々の心を打ちました。

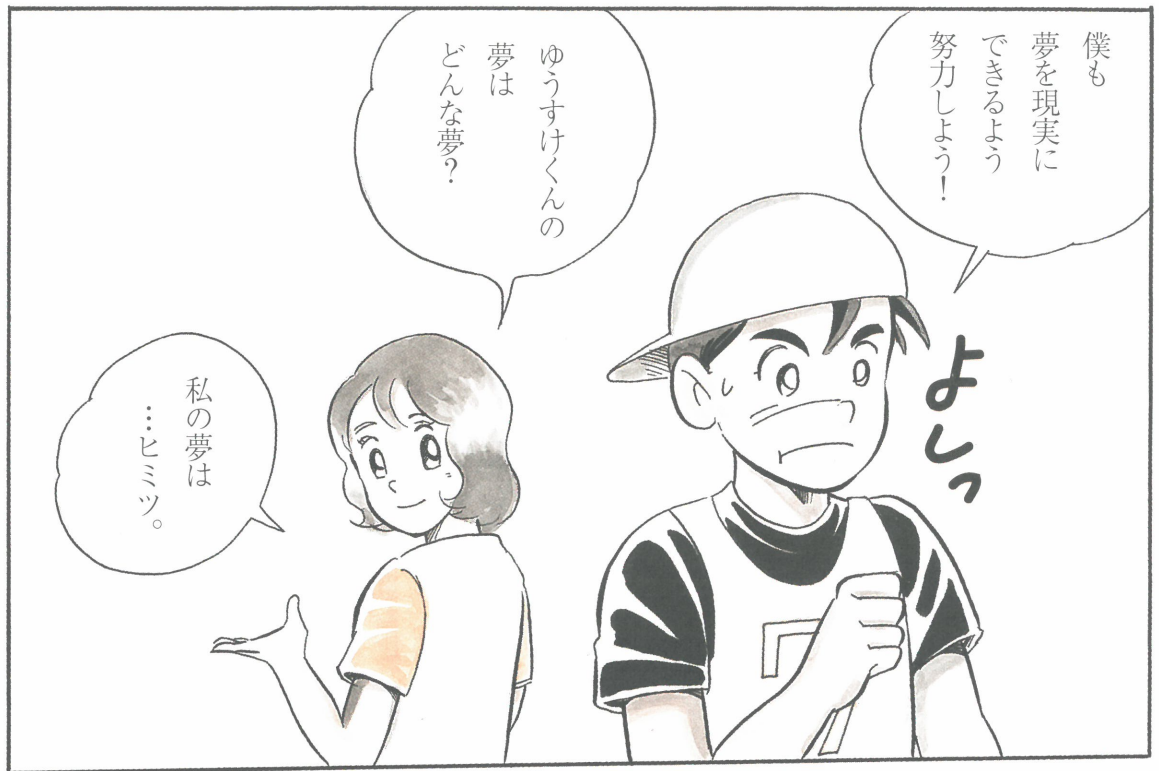
斐三郎は
大洲が生んだ
大いなる偉人です。

そして、
幕末維新の
動乱期に活躍した
偉人でもあります。

斐三郎が
洋学、測量術、
航海術、砲術を
学んだのは時代が
必要としていた
ものであり、

斐三郎先生は
私たちの
ふるさとの
誇りね。

また、それらを
学んだからこそ、
時代を変える
出来事を起こし、
優秀な人々を
育てられたのです。



僕も
夢を現実に
できるよう
努力しよう！

ゆうすけくんの
夢は
どんな夢？

私の夢は
……ピミンシ。

よっ

武田斐二郎年譜

年号(西暦)

文政十年(一八二七)

主な事から
九月、喜多郡中村(現在の太田市)
に住む勘右衛門、三保子の次男
として誕生

天保十二年(一八四二)

明倫堂に入校 山田東海に儒学、
漢詩を学ぶ

弘化五年(一八四八)

緒方洪庵塾に入門

嘉永三年(一八五〇)

佐久間象山塾に入門

安政三年(一八五六)

函館奉行諸術調所教授となり、
弁天崎砲台を着工

元治元年(一八六四)

六月、五稜郭完成 八月に函館を去る

明治元年(一八六八)

松代藩士官学校教授になる

明治五年(一八七二)

大阪兵学寮教授となる

明治七年(一八七四)

陸軍大佐兼兵学大教授になる

明治八年(一八七五)

兵学寮幼年学校長になる

明治十三年(一八八〇)

一月、死去 浅草新谷竹智光院
に埋葬(五十四歳)